

30年度 2月 園だより

- <教育目標> ・元気に遊ぶ子ども
・豊かに感じる子ども
・考え工夫する子ども

H31. 1. 30 文京区立本駒込幼稚園



「日常」と「非日常」の関係

副園長 和島千佳子

幼稚園教育では、幼児が自ら身近な物、人、出来事などに関わりながら遊びや生活を繰り広げることが大切にしています。年度当初は新しい環境や変化に慣れ安心して園での日常を過ごせるようになることを大切にしてきました。そして、様々な経験が子どもたちの遊びの種や糧となり、成長した姿が見られます。年度の終わりに差し掛かった今の時期は、園に外部の講師を迎えることや、園外に出掛けることなど、普段とは少し違う体験をする、いわば「ちょっとした『非日常』」の機会（行事）も年齢に応じで多く取り入れています。その中から、1月の様子を2つご紹介します。

近所の東洋大学相撲部に来ていただいた「わくわく相撲」では、ホールにマットを組み合わせた土俵ができ、大きな体つきのまわしを付けたお相撲さんが目の前に登場しました。相撲の型やルールを教してもらい、手本を見ながら「しこ」や「すり足」など一緒に行いました。そして、裸足の寒さもなんのその、汗をかきながらお相撲さんとの対戦に真剣な表情で、カー杯取り組む子どもたちにたくましさを感じました。土俵はその後遊べるようホールに残しておくこと、食後、先生に見守られながら、子どもたちの相撲が始まりました。「一対一で行う」「パンチやキックは駄目」「土俵から出たり、足の裏以外の場所が土俵に付いたら負け」という、お相撲さんに教わったルールをちゃんと覚えていて、さくら組は片付けの時間になるまで繰り返す幼児が多く、盛り上がっていました。翌日以降も、園庭でマットの土俵を作り相撲が行われ、次第に行司の役を行う子どもも出てきて、ちゅうりっぷ組、さくら組では翌週末の「遊ぼうデー」の遊びの中にも「相撲」が登場しました。

冬は影が長く伸び、生活の中で影に目が留まりやすい季節です。「影絵と音楽の鑑賞会」では、ホールがいつもと違う幻想的な空間になり、人形だけでなく全身を使った光と影のパフォーマンスに目が釘付けになりました。講師の川村亘平さんに人形をお借りして実際に人形の手足や口を自分で動かしたり、自分の影を大きなスクリーンに映して動いてみたりもしました。その後、園庭の地面や、すみれ組が自然光の当たる場所に作ったスクリーンにいろいろな物や自分の体を映して試し、幼児同士で気付いたことを言葉にして伝え合う子どもたちの姿がありました。

行事を遊びにつなげる工夫をしてきたことで、幼児の興味・関心や経験の幅が広がり、日々の遊びの充実につながっているということ、2つの事例から改めて実感しました。

次年度の教育計画を考える時期となりました。今年度の評価反省をもとにただいま検討中ですが、基盤となるのは日々繰り返される幼児の生活と、そこで毎日展開されている遊びを通しての学びです。そのことを十分踏まえながら、経験の連続性や関連を考慮し、アクセントとなる行事の時期やもち方、内容等を精選していきます。園児のよりよい成長発達を支えるため引き続き、保護者の皆様や地域の方々のご理解とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

